

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月13日 11:59:12

2011年01月13日 11:59:12

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

Call Slip

3122
7

<請求票> (控)

書名
資料名: 現代支那概論
巻次: 動く支那
著者名: 矢野仁一 // 著
出版者: 目黒書店
出版年: 1938 2版
大きさ: 19cm
頁数: 308p

資料名: 現代支那概論
巻次:
著者名: 矢野仁一 // 著
出版者: 目黒書店 頁数: 308p
大きさ: 19cm 出版年: 1938 2版

切り取り

所蔵館: 中央
所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンタ

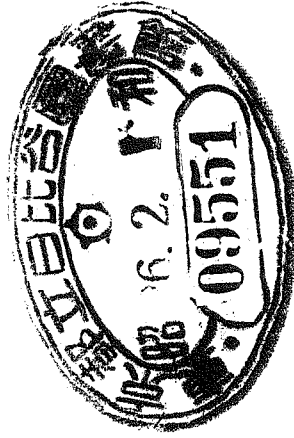
所蔵館: 中央
所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンタ
配置場所: 1/65A 中)MB1書庫A
資料ID: 1126050333

配置場所: 1/65A 中)MB1書庫A
資料ID: 1126050333

新東自人社	力	事
↓		
新東自人社	請求	報告
MB1 マイカ B1 アルファベット 原紙 縮刷		
MB2 マイカ B2 洋 中 朝		
行 1F B1 B2		
多 児 青 1F B1 B2		

請求記号
3122
7

序 1~2
目次 1~2
本文 1~31



現代支那概論——動かざる支那

序

支那問題の複雑性は世界歴史の潮湧の如く押寄せる大勢の力と、數千年來積疊せる歴史的傳統の力とが同時に支那に働きつつあるが爲めである。現代支那を論ずるもの或は其の既に昔日の支那に非ることを説き、或は其の舊態依然たることを説き、一見實に人をして歸趨に迷はしむるものがある。私は其の昔日の支那に非ずと説くものも、其の舊態依然たるを説くものも、共に支那問題の一面の眞を得るものにして、其の變動的發展的時局的の部分に就いて之を觀れば、實に昔日の支那に非るも其の本質的の部分に

序

序

就いて之を觀れば舊態依然たるを失はざることを信ずるものである。本書は主として支那問題の本質的なるものに就いて論じたるものにして主として其の變動的、發展的、時局的なるものに就いて論じたる本書の姉妹篇現代支那概論「動く支那」とは正に對蹠的なるものである。本書中の治外法權に關する論文は顧維鈞君のコロンビア大學に提出したる學位論文支那における外國人の地位を論評したるものであつて、私としては多少の苦心を費したるつもりである。支那問題の中心に觸れるところも少なからず。切に江湖の一讀を望んで止まざるところである。

昭和十一年三月

著者

現代支那概論——動かざる支那

目次

支那の社會の固定性	一
支那の歴史における近代と古代	三
支那の共和政治と帝政の遺産	四
支那の帝政時代と共和政治時代	六
支那における外國人の治外法權	一四
支那における治外法權の起源と其の撤廢の問題	二〇
王道政治の理論と實現	二三

冀東政府は宜しく王道政治の實驗場たるべし……………三三

支那の眞の統一と日本の對支那外交……………四六

支那内亂の慘禍と國民革命の成否……………五五

三民主義と露西亞の支那援助……………六一

目次終

光風文庫

支那の社會の固定性

支那の社會は大體において士と庶民とに分かれてをる。これは昔から今日まで餘り變りがない。士は知識階級であり、同時に治者階級である。或は知識階級であるが故に治者階級であつたといつた方が適當かも知れない。政治を遊戯とし或は政治を職業とする階級である。庶民は之に反して無識階級であり同時に被治者階級である。無識階級なるが故に被治者階級であつたといつた方がよいやうな階級で、農、工、商を業とし、政治には毫も關係せず、また毫も政治に對して興味を持たないものである。さうして支那の人民の大多數は庶民であつて、士の階級に屬するものは、之に比較すれば極めて少數に過ぎない。

支那を一の社會として觀察すれば、政治に關係なく政治に興味を有せざる大多數の人民は社會の内部中心を構成し、政治を遊戯とし或は政治を職業としてをる少數の士紳或は政客は、其の極めて表面の部分において活躍してをると考へることが出来る。猶ほこの表面の一部分或は一隅において政治に反抗する不良の匪民が跳梁してをると考へれば、一層よく支那の社會の真相を盡すことが出来るやうに考へられる。この不良の匪民は政治が善いとか、政治の力が強いとかいふ場合には引込み、政治が悪いとか、政治の力が弱いとかいふ場合には出て來るといふ不平分子である。支那の歴史はこの社會の表面の部分において政治を遊戯とし或は政治を職業とする分子間の政權爭奪の歴史、或はこの分子と之に反抗する分子との政權爭奪の歴史である。支那の社會の内部は其の表面と接觸する部分において多少の動搖影響を免かれざるも、實質においては殆んど影響を被ぶらないといつてもよいのである。それ故若し圖を以て支那の社會を示せば、内部と

表面との分界線は波線を以てすべく、表面において政治を遊戯とし或は政治を職業とする部分と、之に反抗する部分との分界線は、政治の善惡強弱に依つて移動することを表示する爲め實線を以てせずして虚線を以てすべきものであらう。實際においては政治に關係せず政治に興味を有せざるところの人民も、政治に従事し政治に興味を有してをるところの士紳或は讀書人、或は所謂政客も、政治に反抗する不良の匪民も、到る處に混住雜居してをるのであるから、表面此の如く截然たる分界が認めらるゝわけではないけれども、深く支那の社會を省察すると、かういふ分界があり、またかういふ分界があるものとして考へると、支那の社會はよく分かるやうに考へられる。

支那の大多數の人民は政治は善いから之に依頼するとか、政治が悪いから之から離るといふのではなく、政治といふもの其のものを無用のものと考へてをるやうである。

臺灣の人民が日本の政治を不止費氣といつて、ひどく煩擾がつてをるといふことである。支那の人民の政治に對する考へをよく示すものである。彼等は政治に依つて自分達の利益を保護してもらはふといふ考へがないから、政治は必要でない、租税を取らるゝだけ、必要でないよりは却つて悪いやうに考へ、成るべく之を逃避し之から遠ざからうといふ心持になつてをるやうである。政治を不必要と考へるといつても、無政府主義者のやうに、積極的に進んで政治を否認し、積極的手段に依り政治といふものを無くして仕舞はうと努力するのではない。さらしふ積極的の考へ積極的の努力は、單に自分の利益さへ保護さるればよいといふ極端の利己心のみで出来るものではない。社會全體の利益、人民全體の利益といふことを考へなければ出来ない筈である。然るに彼等は單に自分の利益さへ保護さるればよいのであるから、進んで積極的に政治を無くして仕舞はうなどは考へない。況してそんな努力はしない。少數の人民が政治を遊戯とし或は政

治を職業として、善い政治をなし、或は悪い政治をなし、または政權の爭奪をなしても、それはなすに任せて、自分はただ其の影響其の禍害を成るべく被ぶらないやうに、被ぶつても之を最小限度に止むるやうに、之から遠ざかり之から逃避せんとするのである。

政治が善いとか或は政治の力が強いとかいふ場合に引込み、政治が悪いとか或は政治の力が弱いとかいふ場合に出て來るといふ分子は、匪盜棍徒のやうなもので、若し政治といふものが無いやうになれば、匪を懲して良を安んずるといふことが出来なくなり、大多數の人民はかういふ分子の爲めに損害を被ぶり、劫掠の禍に罹らなければならぬやうにも考へらるゝが、彼等はそれは政治の害と餘り變りがないやうに考へてをるのである。彼等は政府の課税といふことも、匪盜の劫掠といふことも同様に考へ、政治がある爲めに之に對して租税を納むるは、土匪群盜あるが爲めに之に對して貢納金或は贖身銀を拂ふことゝ格別違ひがないやうに考へてをるのである。政府に對して租税を納むると

いふことは、政治を不必要と考へてをる人民に取つては、政治に依つて利益を保護してもらふ代りに、義務として納むるといふ意味ではなく、政治の掠奪を免かる爲め、或は政治の損害を少なくする爲め、換言すれば政治を避くる爲め慰撫の意味で之を拂ふに過ぎないのである。それ故政治が無ければ無いで、匪盜棍徒などの掠奪を免かる爲め、或は其の損害を少なくする爲め、之に貢納金或は贖身銀を拂へばよい、同じことであると考へてをるのである。

南宋時代に官の招撫を受け、歸順して官吏となつた福建の海賊鄭廣が其の前身が海賊であつた爲め、同僚の衆官は賤しんで交際しなかつたので、鄭廣有詩上衆官、文武看來總一般、衆官做し官却做賊、鄭廣做賊却做し官といふ詩を作つて衆官に示したといふことであるが、支那では官も賊も餘り變りがないのである。臺灣に汝去し山我去し官といふ諺があるといふことである。少なくとも人民から見れば官も賊も餘り變りがなく、官か

ら取らるゝ租税も賊から取らるゝ貢納金、贖身銀も性質において格別の差がないやうである。張作霖は滿州で馮麟閣など、並んで馬賊の頭目であつたことは知らぬ人もない程である。山東土匪軍の頭目であつた孫百萬は青島游撃軍の司令官となり、河南老洋人部下の土匪なども國軍十二營に改編せられ、老洋人、張得勝、李明盛などの頭目は國の字を授けられて、それぞれ張國信、張國威、李國治など、稱したことも近頃有名な話である。臨城事件の匪魁孫も旅長に任ぜられた。

三

支那人が平和的の人民である、平和を好む民族であるといふことはよくいはるゝ話で、西洋人の著書にもよくさういふことが述べてある。日本の學者などにも支那の民族性を論じた人も少なからずあるが、いづれも平和を好むといふ性質を其の一に擧げてゐない人はないのである。然るに支那には絶えず革命の騷亂が起つてをる。其の度び毎に

随分慘酷な戦闘殺傷が行はれてをるのである。梁啓超は支那の二十四史は徹頭徹尾血肉狼藉の殺傷史であるといつてをる。平和を好む性質は支那の顯著な民族性の一であるといふ人は随分この説明には困るのである。それでこれは支那の人民が戦争を好む爲めではない、却つて平和を好む人民であるから、政治上の弊害に對しても、或る程度までは耐へてをる、他の人民ならば耐へられない程度までも耐へてをるが、弊害がよくよく甚だしくなり終に耐へられないやうになり、始めて已むを得ず革命の戦亂を起すに至るのであるといふやうに、説明にならぬやうな窮した説明を試みてをる人もあるのである。然し清朝の中頃に起つた白蓮教徒とか、長髮賊の叛亂とかいふものは非常な騷亂で、一方は五省九年、一方は十六省十五年に亘つてをるのであるが、白蓮教徒の叛亂は康熙、雍正、乾隆の仁政を受けた後に起り、長髮賊の叛亂は嘉慶、道光の後で、康熙、雍正、乾隆の仁政とは比較が出来ぬとしても、そんなに酷い堪へられない程の悪政虐政などはな

かつた時に起つてをるのである。支那の人民は平和を好む性質であるが、悪政が耐へられないやうになつて、始めて已むを得ず革命の戦亂を起したといふのでは説明が出来ないのである。清朝末の革命亂にしても、決して悪政が耐へられなくなつて起つた戦亂とは考へられないのである。然らば支那の人民の平和を好むといふ性質と支那に絶えず起つてをる戦亂、殺傷の事實とをいかにして矛盾なく説明することが出来るであらうか。

私はこれは革命の戦亂とか其の他の騷亂とかいふやうな事實は、支那の社會の表面において、政治を遊戯とし、若しくは政治を職業とする少數の人民、乃至政治に反抗し、政治が善いとか、政治の力が強いとかいふ場合には引込み、政治が悪いとか、政治の力が弱いとかいふ場合に出て来る匪盜棍徒のやうなものとの間に起る事實であつて、大多數の人民の間に起るところの現象ではない。大多數の人民は成るべくさういふ戦亂、騷亂の影響を被ぶらないやうに、損害を受けないやうに、成るべく迅速に戦亂、騷亂を通

過せしめ、若しくは終息せしむる爲めに努力をなすに過ぎないと考へれば、説明が出来るやうに思ふのである。

支那の人民はただ自分だけさういふ戦亂、騷亂の影響を被ぶらないやうに、損害を受けないやうに、之を避けよう避けようとする爲め、敢て反對もしなければまた阻止もしない。反對するか阻止かすれば、戦亂、騷亂は其處に停止してそれだけ損害を受けなければならぬ、損害を受くることは嫌だから反對も阻止もしない。其の爲めに彼等自身は損害を免かることは出来ようが、戦亂、騷亂は容易に大きくなる。容易に平和は攪亂され、大局騷亂の形勢を馴致するに至るのである。私は支那程容易に平和の攪亂さるゝ國はなく、また支那程容易に平和の恢復する國もないと思ふのである。容易に平和が恢復するといふことは、また容易に平和の攪亂され、眞の平和の恢復せざる所以であるかも知れないが、兎も角直ぐちよとは落着くやうになるのである。平和は攪亂されたま

まに落着き、混亂状態のまゝに靜止状態となるやうな形勢になるのである。武昌で革命の戦亂が勃發したのは明治四十四年即ち宣統三年八月であるが、一個月経つか経たぬ中に、十餘省は獨立を宣言し、恰かも革命軍は十餘省を取つたやうな形勢になり、非常な大亂の状態となつたのである。然しかういふ風に容易に十餘省は獨立を宣言した爲め、格別な騷亂はなくして濟み、かういふ状態のまゝに落着いたのであつて、大亂といへば大亂のまゝに固まつて、平和が一先づ恢復したやうなわけである。さうして翌年の二月には清朝の帝室が退位し、共和政府は形だけでも兎も角も出来て仕舞つて、もはや格別の戦亂はないやうになり、大亂状態が終息したのである。亂るゝことも随分早い、治まることも随分早いのである。

段祺瑞氏や王正廷氏などは、餘り早く革命戦亂が治まり、革命主義を徹底せしむることが出来なかつた爲めに、其の後も絶えず内亂が起り、混亂状態は續くに至つたやうに

いつて、革命の戦亂は早く治めてはならなかつたのに、早く治めたのが悪かつたやうに考へてをるけれども、私は早く治めてはならなかつたのに早く治めたのではなく、早く治めなければならなかつたので早く治めたのであると考へるのである。早く治めなければ當時の共和軍は必ず強いといふわけでなく、必勝の形勢があつたわけでないから、時機を失して少しでも負け色が立たうものならば、折角清に對して獨立を宣言した十餘省は、また革命軍に對して獨立を宣言するかも知れない。どっちでも形勢のよい方に轉じて、戦亂、騷亂の影響損害を成るべく受けないやうに成るべく迅速に之をして通過し經過し進行せしめて仕舞はうとするのが、支那の大多數の人民の考へであるから、民心の歸趨はどうか分らない、早く有利の地歩を占めて時局を收拾しなければならぬ必要があつたから之を治めたので、其の外に途がなかつたのである。革命主義を徹底せしむるまで、革命の戦亂を早く治めないやうなことは出来べきことなどではなかつた。

それで其の後も絶えず内亂が起つてをるが、また絶えず治まつて一時的の小康を得てをるのである。安直戦争でも、秦直戦争でも、大正十三年の直隸派反直隸派の戦争でも、日本の支那通などがどっちが勝つたらうかなどと、息を殺し片唾を呑んで心配してをる中に、さっさと鎮靜して仕舞つたのである。何時また平和が攪亂され、混亂状態に陥るかも知らぬやうな不安な平和ではあつたが、兎も角も平和状態となつたのである。

此の如く支那は混亂時代といつても、絶えず平和は起つてをる。さういふわけで支那の社會においては、何時でも平和にならう平和にならうといふ力は、力強く働いてをるといつてよい有様がある。平和時代も混亂時代も、支那においてはたいした違ひはない。平和時代であつても、混亂、騷亂はないわけではない。康熙、乾隆の平和時代でも絶えず一時的、局部的の騷亂は起つてをる。ただ平和の大勢には關係がないから平和時

代と稱するのである。混亂時代でも平和は絶えず起つてをる。ただ混亂によつて平和は頻繁に中斷さるゝだけのことである。それだから支那の今日は混亂時代といはなければならぬが、人民は自からこの混亂状態に満足して、安んじて生業に従事し、生活を享樂し、かういふ混亂状態はかう何年も續いては仕方がない、何とかしなければならぬなど、あせりもがくやうな有様は更でない。混亂状態其のまゝが平和状態といふ有様があるのである。

四

これはどういふことを意味するか。かういふやうに、亂れたり治まつたりしても、大勢が常に平和にならう平和にならうとしてをる傾きのあることは、支那の戦亂、騷亂といふものは、社會の極めて表面の部分の波瀾に過ぎることを意味するものである。政治を遊戯とし、若しくは政治を職業とする少數の人民、乃至政治に反抗する不良分子の

間の騷亂に過ぎず、社會の内部中心を構成してをるところの大多數の人民は、この騷亂の影響損害を成るべく受けないやうに、革命軍或は叛徒軍の勢ひが強いやうになると、獨立とか、政府離脱とかいふことを宣言して、少しも抵抗せず、この騷亂をして影響を自分達の内部に及ぼさしめず、さっさと表面だけを通過し、經過して仕舞はしむるやうに努力するのであるから、丁度波の進行するやうなもので、騷亂の進行する有様を眺めてをると、いかにも非常の大騷亂となつたやうに見えるけれども、其の實支那の社會の内部は少しも擾亂されず、平和な靜止状態を續けてをるのである。それ故騷亂が表面だけを通り過ぎて去つて仕舞へば、それと共に直ちに平和な靜止状態が現出するのである。支那において容易に平和の擾亂さるゝのも、人民のこの無抵抗主義の爲めであり、また平和の容易に恢復するのも、また人民のこの無抵抗主義の爲めである。

前に述べたやうに清朝末の革命の時に、あつちでもこつちでも獨立を宣言し、一個月

足らずの中に十餘省は獨立を宣言したのであるが、私はこれは十餘省の人民の無抵抗平和主義を意味するものと考え。革命軍の方では旬月ならずして十餘省を光復したなどといつてをるが、何も十餘省の人民は革命主義を賛成して、革命軍に味方して政府軍に反抗するといふやうな意味はないのである。革命軍の攻撃侵害を免かるゝ爲めの自衛手段として革命軍の反對敵抗しつゝあるところの政府に屬するものでないことを宣言したものに過ぎない。政府軍に屬さない以上は、革命軍に屬することになるではないかと反問する人があるかも知れぬが、若し革命軍に屬したとすれば、それはただ政府軍に屬さない程度の屬し方に過ぎないのである。革命軍に屬し、革命軍と共に政府軍に敵抗するといふやうな屬し方ではない。獨立を宣言しない前には政府軍に屬したわけであるが、それも同様に革命軍に屬さない程度の屬し方で、清朝に屬し、清朝の爲めに革命軍に當るといふ程度の屬し方ではなかつた。さういふ屬し方であるから、どちらでもよいので

ある。政府軍の方が強ければ政府軍に屬し、革命軍の方が強ければ革命軍の方に屬し、無抵抗主義によつて革命の騒亂を迅速に通過し進行せしめて、其の侵擾損害を極めて表面の部分に止まらしめ、内部に及ぼさしめないやうにするのが、支那人の考へであり、また其の態度である。

五

支那人の無抵抗平和主義は大正十三年支那に起つた盧永祥、何豐林の兵隊置き去り事件でも證明される。それは盧、何兩人が蘇浙戦局の不利となりし結果、上海郊外において幾萬の軍隊を置き去りにして突如日本に逃亡した事件である。私は大正十三年末福井縣の海岸で坐礁沈没した我が海軍船關東の艦長鳥野中佐が責任を一身に負ひ、部下をいたはり自分は艦と生命を共にせんとした悲壯な態度と比較して、其の責任感において非常に違ふことを感ずるのである。盧永祥が若し最初に宣言した如く最後まで踏み止まり、

最後の一人までも戦ふといふ決心をなしたならば、上海近傍は随分兵燹の慘禍に罹り、
久しい間兵亂の巷となることを免かれなかつたと考へる。私共から考へると、盧永祥は
浙江などももう少し熱心に支持したならばと思はるゝに、實に未練なく拋棄し、浙江の
ことは浙江人に委せるといつて少しも執着しなかつた。日本人のやうな態度を取つたな
らば、どちらが勝つか、どちらが敗けるか分からないやうな戦局が永く續き、非常な激
戦となり、それだけどちらかに勝敗がつけば結局永久の安定は得らるゝかも知れぬが、
一時は非常の激戦を免かれなかつたことは明かで、それは支那の人民としては非常に困
るのである。彼等としてはどちらが敗けても構はない。永久の安定などが得られなくとも
少しも困らない。初めより政治とか政府とかに依つて、どうかしようといふ考へはな
いのであるから、時局が安定しなくとも、安定した政府が出来なくとも困らない。ただ
戦局が續き、戦亂の巷となり、激戦などが行はるといふことは困るのである。彼等は

一意戦争なきを希望し、戦争によらなければ時局の安定が望まれないといふ場合にも、
戦争までもして時局の安定を望まうとは思はないのである。支那の人民はかういふ心理
があるから、盧永祥等が幾萬の節制なく食糧なき軍隊を置き去りにして遁げて行つたと
いふことは、彼が最後の一人まで戦ふなどゝいつて踏み止まつてをるよりは、一時置き
去りにした軍隊の爲めに非常に困るやうなことがあつても、それは自分達でどうかして
處置して仕舞へば、それだけ早く戦亂から免かるゝことが出来、平和が早く恢復するわ
けで、其の方が餘程よいと考へてをるやうである。日本などでそんなことをしたならば、
盧永祥は二度と政治界に立つことは出来ないやうになるのであらうが、支那では日本程
盧永祥を非難しない。上海總商會は無主の兵數萬人の食糧を給し、また其の解散費を負
擔したのである。

また大正十三年の第二奉直戦争において、馮玉祥といふ裏切者を出したのであるが、

かういふ裏切者を出すといふことは、清朝末の革命戦亂以來支那の内亂を通じて起つてなる顯著な現象である。直隸派が勝つか、反直隸派が勝つかとやきもきして見てをると、ひょっくり裏切者が飛出して局面ががらりと變り、見當が大概外れて仕舞ふので、見てをるものにつては大變面白い。私は清朝末の革命戦亂當時北京にゐたが、北洋第二十鎮の統制であつた張紹曾が兵を灤州に擁して、欽定憲法取消、民主主義憲法承認を強要した時と、段祺瑞が袁世凱の手先きとなつて、政府軍側の將軍四十餘人と聯合して、死を以て共和に反對すといふ電報上奏をなしてから、僅かに數週日の後に共和は大勢の向ふところであるから、今の内に退位せらるゝがよい、今の内に退位せらるれば、優待條件によつて永く優待を受けらるゝことが出来る、これは清朝の厚恩を受けたる臣子の分として、清朝に對して最後の忠義を盡す所以であるといふ意味の電報上奏をなした時程、「ショック」を受けたことはない。これで清朝は滅びたのである。私共から見

れば、張でも段でも裏切者としか思はれないが、支那の人民から見れば、自分達さへ始終同背を變へてをるのであるから、餘り悪いことゝは考へないやうである。却つて民心の歸趨を察し、大勢に順應するといふことは、戦争をなさずして早く平和に導くもので、自分達をして戦亂の影響損害を免かれしむる所以であるから、却つてよいと考へてをるやうである。

それから支那において武力統一といふことがひどく不評判になり、段祺瑞の武力統一も、吳佩孚の武力統一も皆失敗したといふことは、私はやはり支那人民の無抵抗平和主義の爲めであると考えるのである。眞に武力があれば、實際に武力を用ひずして統一の目的を達するのであるが、少しばかり武力があるといふので、武力統一を標榜すると、或る程度の統一は出来るかも知れない。然しそれは武力を用ひずして武力統一を標榜しただけで統一の出来る程度の統一である。然し終に實際に武力を用ひざれば統一が出来

ない點に達するのである。さうすると勝敗は分からなくなる。この勝敗が分らないといふことは、既に武力統一を主張する方の弱點を示すこととなるのである。それでも武力を用ひやうとすると必ず激烈な争闘は免かれない。さうすれば人民の損害は免かれないから非常に不評判となる。無抵抗主義の人民の回背は變るやうな形勢になる。武力統一は益々六かしくなる。

革命軍が清朝末の革命戦亂當時、旬月の間に十餘省の光復をなし遂げたのは、革命軍の大成功であるやうにいつてをるが、これは殆んど武力で成功したのではない。愈々武力を用ひなければならぬ點に達すると、勝敗は分からなくなる。少しでも敗け色が立つやうになれば形勢が變るのであるから、武力統一を棄てなければならぬことになり、共和政治などに毫末の理解もない袁世凱を大總統に推戴するといふやうな條件で、名ばかりの共和政治を協定して満足しなければならぬことになつたのである。清朝の方からい

つても、武力で解決せんとすれば、必ず激烈な戦争をなさなければならぬことになり、さうすると、武力解決といふことが非常に悪いといふことになり、資政院で激烈な反對があつたのみならず、清朝政府軍の武力を代表した段祺瑞までも武力解決が悪い、大勢に順應しなければならぬといひ出すやうになり、終に之を抛棄しなければならぬことになつたのである。この段祺瑞が共和政府の總理大臣になると、武力でわけもなく支那の統一が出来ると思へるに至つたことも可笑しいが、やはり實際に武力を用ひなければならぬ點に達して敗れたのである。吳佩孚の武力統一も、其の成功したところは武力を用ひずして、單に武力を標榜しただけで統一することの出来る部分を統一したといふに過ぎないのであつて、眞に武力で統一しなければならぬ點に達すると、武力統一を標榜したことが邪魔になり失敗して仕舞つたのである。

此の如く支那の大多數の人民は政治の影響を免かれ、戦亂、騷亂などの損害を受けな
いやうにする爲め、無抵抗主義によつて、或は租税を豫納して政治の勢力を排斥し、或
は獨立を宣言して、迅速に戦亂、騷亂をして其の表面の部分を通過して経過せしむるや
うに努力してをるのである。政治は善いから之に依頼して生命財産の安全を保護しても
らばうとするのではなく、また政治が悪いから特に之から離れて叛亂に興し、革命軍に
屬するといふのではない。政治に對して望むところは、生命財産の安全の保護などはし
てもらはなくともよいから、租税を成るべく取らないやうにしてもらひたい、生命財産
の安全を脅かすやうなことをしないでもらひたいといふに過ぎない。政治といふものに
對して保護といふことを望まないことになると、政治はただ租税を取り、生命財産の安
全を脅かす外、何の効能もないものとなる。無用有害のものとなるわけである。それだ
から支那の人民は政治に全然興味を持たず、ただ政治を逃避するといふ考へになつてを

るのである。

支那の人民がどうしてかういふ考へになつたか。支那の政治が悪かつたから、人民は
之に興味を持たなくなり、之から逃避せんとするやうになつたものであらうか。政治が
悪ければ、進んで積極的手段に依り、之が改善を圖り或は之に反抗し、自から政治上の
權力を取つて之を善くするといふ方法を考へてもよいわけであるが、支那の人民がそれ
を考へずして、消極的に之を逃避し之を防禦するといふ方法を考へたといふことはどう
いふわけであらうか。それに支那の政治は必ずしも西洋諸國の政治に比して悪い政治で
あつたとは考へられない。さうすると、支那の人民の文弱であり保守的退嬰的であるこ
とは、また其の民族性の一であるといつて、それでも擔ぎ出さなければ説明が出来ぬこ
とになるのである。

私は支那の政治が悪かつたから、人民は政治に興味を持たず、之から離れ之から逃避

せんとするやうになつたのではなく、支那の政治は徳治主義の政治で、其の及ぶに任せて、及ばざるところを無理に治めやうとしなかつた爲め、まるで政治が及ばず、其處に人民の自治が生じ、また支那の大家族制度の如きものが發達し、政治を必要とせざるに至り、政治上の保護を望まぬことになつた結果、終に政治を害惡視し之から逃避せんとするに至つたものでないかと考へるのである。

隨つて元の時代に蒙古人が支那を支配した結果、蒙古人若しくは支那人以外の外國人即ち所謂色目人などが政治上重要な地位を占め、人民の利害休戚を念とせず、旱魃、飢饉、水害、疾疫などの場合にも、人民の疾苦に對して殆んど責任を感じず、善政を施して人民を救濟しようとはせず、却つて苛斂誅求、人民を勒索擄取して私腹を肥やさうとしたので、これより後支那の人民は政治に依頼する考へを棄て、政治の良否善惡を問はず、自分等の利害休戚は自分等自身之に當らなければならぬといふやうな考へを持つこ

とになつたといふやうな説もあるけれども、私は賛成し兼ねる。

成程義田、社倉といふやうな、官が世話を焼いて、飢饉の場合、若しくは米價騰貴などの場合に困難する人民を救濟しようとするやうな設備は隋、唐、宋以來起つてをるのである。かういふものが起つたといふことは、當時未だ人民が官と關係を絶たなかつたといふこと、また人民自身官の保護に依らずして、自分達のことは自分達で世話するといふやうな考へになつてゐなかつたといふことの證據と見られぬこともない。然し元の時に政治が悪かつたから、遽かに人民が政治に愛憎をつかすことになつたといふのは、どういふものであらうか。五胡十六國の時代だつて、北支那の方はやはり他人種の支配の下にあつた。かういふ時に支那の人民が政治の保護恃むべからずとして、自から自分の利害休戚に對して責任を負擔する考へにならなかつたといふことも矛盾である。

昔支那の地方において教化、裁判、租稅、警察などのことを掌つてゐた三老、耆夫、

游徼といふやうな郷官は、隋の時以來廢されて、官と地方との聯絡が絶えることになり、其の結果として人民は政治から離れることになつたやうに考へる説もある。顧炎武の「日知錄」にも、これは隋の文帝が古を變じたもので、興亡の由つて岐かるるに至つた關鍵を爲すものであると論じてあるが、隋の時まで引續いて存在した古來の郷官が、文帝の時に廢されたことは縱令事實であるとしても、それは、必要がなくなつたか、利益が弊害に伴はなくなつたか、いづれかの理由に依るものであらうから、それが廢されることになつて、人民が政治から離るるやうになつたと考ふべきでなく、人民が政治から離るるやうになつて、古來の郷官が廢されるやうになつたと考ふべきであるまいか。兎も角郷官が猶ほ存してゐるやうに考へられてをる隋以前に、人民は政治に親しみをもち、政治に依つて生命財産の安全を保護してもらはうといふ考へがあり、政治が悪ければ積極的手段に依つて其の改善を圖り、飽くまでも政治上の手段に依頼するといふ考

へであつたといふことは考へられないことである。私は蒙古や五胡が容易に支那を征服することが出来たのは、既に支那の人民は政治などは誰に任せても構はない、蒙古人だらうが、五胡だらうが、差し支へがないといふ考へになつてゐたからであると考へるのである。

支那の歴代、革命の戦亂が頻繁に起つて、頻繁に成功したのも、支那の人民が一日も早く革命によつて生ずる混亂より免かれたいやうに考へてをる心持に投じた爲めであるまいか。

さういふわけであるから、私は支那の人民が政治に興味を持たず、政治から逃避せんとするやうな考へになつてをるのは、昔からのことであると考へるのである。

七

支那の人民の平和を好む性質は、其の先天的民族性であるといふことは一般に學者の

唱へてをるところであるけれども、果してどうであらうか。

學者は支那の人民が先天的に平和を好む人民であることを證明する爲めに、孔子、孟子の仁義を本とする平和説や、老子の虚無説、また戰國時代に墨子とか宋攄とかいふやうな非戰論平和説を唱へて天下を周遊し、諸侯に説き國君に説くことに骨折つた人のあつること、墨子、宋攄ばかりでなく、戰國時代の諸子百家の説には随分非戰論平和説に向つてをるやうなもののあることなどを擧げて、此等の説は支那人の平和を好む本來の性質から發したものであると論じてをるのである。成程これは支那人の戰を好むといふことを證明するものでないかも知れぬ。戰を好めるは國君であり諸侯であつて、孔子、孟子、宋攄は此等の國君諸侯をして戰を止めしむるに骨折つたのである。其の他の學説も目的は國君諸侯にあつたのである。人民が戰を好むから之を止めしむる爲めに説いたものではない。然し平和を好む性質は支那人民の先天的性質であつて、此等の學者學説は

支那人民の此の性質を代表したものであるとは直ちに考へることが出來ない。私はそれよりは此等の學者學説は、支那の人民が支那の徳治主義の政治の結果、自から發達したる自治の組織を擁護する爲め、後天的に政治の弊害、戰爭の禍害を避けようとする平和主義になつてをるので、戰爭を止めなければ人民の心を得ることが出來ない、人民の心を得ることが出來なければ國君諸侯として、人民を治むることは出來ないといふやうに、治人の要術として説いたもので、支那人民の戰爭の禍害を避けたいといふ後天的の無抵抗平和主義を迎合したものであると考へる方が適當であると思ふのである。